

## 校長研修だより13

### 生徒を育てるのによくないのは「焦り」である

2021・6・9 重枝 一郎

以前私は、「方向性」という言葉は何か細い一本道のような感じを受けるので、息苦しくなり好きではない」と話した。そこで、私は“方向感”という言葉を使うことにしている。何か包み込むような感じがいいからである。先生方一人一人の多様な力の発揮しやすさを保障することにつながると思うからである。「方向性」だと、誰かにはマッチするが、誰かには苦しみや主体性の欠如を生む気がする。

この“方向感”を話すときに大切なのは、やり方や指示ではなく、本質を語ることだと思っている。このお便りも、いつもそのことを考えて書いているつもりである。本質を語り、細かいことをどうこう言うことをしないことが大切だと考えている。そこには、事務的だったり、依存的だったりする人をつくりたくないという考えがある。時には、マニュアルが必要な時もあるかもしれないが、主体性と協働性をもって、そこにスピード感をもってやっていくことが、人材育成にもつながると考えている。多少の混乱があったとしても、本質を考えてどうするのかをみんなで決めればいい。これは、本質を見失わない練習にもなる。私たち教師が生徒に求めるところもそういうことだと思う。

さて、先生方や生徒たちにも「縁や出会いを大切にし、自分の強みを生かせる人材」になってほしいと思っている。これは、教師においても、生徒においても、キャリア教育の目標だと考える。そして、自分の強みを生かし、守りより「攻め」の姿勢をもってほしい。

そのため、いろいろあるキャリア教育の目標において、特に2つのことを重視して、教師には仕事、生徒には学習に取り組んでほしいと思っている。

#### 一つ目は、「自己肯定感」である。

自分の良さを適切に理解し、他人と比べなくても「自分はやればできる」という自己肯定感をもつことは、生きていく上での心の支えとなる。何か、誰にも負けないという圧倒的な強みがなくても、「そこそこ」でいいから2つくらいの強みを組み合わせることで自分らしさは十分つくれる。生徒にもそう伝えてほしい。

二つ目は、「縁や出会いの尊重」である。何か、好きなことを仕事にしなくてはならないという強迫観念のようなものは必要ない。こだわりすぎるとこわばっていく。「好き」や「正解」を求めて立ち往生するのではなく、縁や出会いを大切に、「ちょっとやってみよう」と前に進んでいけることも大切な力である。生徒にもそう伝えてほしい。

ここで、今号のタイトルにつなげてほしい。つまり、生徒指導やキャリア教育や生徒を育てるのによくないのは「焦り」ということである。私たち教師は、生徒にとって、社会を垣間見ることができる最も身近な大人の一人である。だから、私たち教師の前向きな姿勢から、生徒に何かを感じ取らせながら、焦らず話をしていくことが大事なのである。